

名古屋港の名物、上がったままの跳上橋

ー 綿花輸入のための鉄道可動橋 ー

■名古屋地区は紡績業が急速に発達

名古屋地域は1918(大正7~8)年頃から紡績業が急速に発展した。それまでは名古屋港の築港が遅れていたために原料綿花は、神戸から陸上輸送で運ばれていた。名古屋港の整備が進み直接伊勢湾へ綿花を輸入することとなった。東神倉庫は1922(大正11)年に日本綿花同業会と綿花荷捌(さばき)と契約を結び、伊勢湾に輸入する綿花はすべて同社が取り扱うことになった。同年9月に名古屋出張所を新設し倉庫・上屋を完成させた。創立時1909(明治42)年の創立時には東神倉庫株式会社と称した。営業所が東京と神戸にあったことからその頭文字を採ったものである。三井倉庫株式会社に改名したのは1942(昭和17)年である。



東神倉庫(現三井倉庫)が掛けた1-2号地間鉄道可動橋

筆者撮影

■綿花を倉庫まで直接運ぶための可動橋

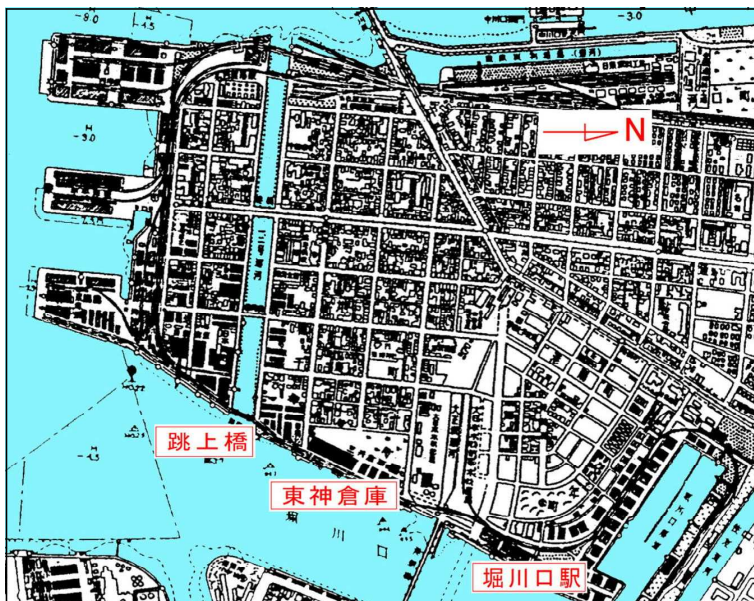
名古屋港の名古屋出張所東神倉庫には鉄道の連絡がなかったので、1・2号地間の運河をまたいで構内まで鉄道を引き込むことを計画した。鉄橋延長60m、線路延長490mなど工事費11万9千円を鉄道省に寄付して倉庫前まで貨車で綿花を引き込めるようにした。この地が現在の築港堀川口倉庫である。可動橋により名古屋駅と堀川口駅は臨港線で結ばれた。

鉄道可動橋は1927(昭和2)年6月20日に1・2号地の運河間に架設された。設計と施工は山本工務所の山本卯太郎である。1・2号地の運河幅30間(54m)に4径間の橋梁が架けられた。そのうち内1径間を純径間50尺(16.5m)の跳上橋とし、残り3径間は固定鋼板桁橋である。跳上橋1回の開閉時間は2分間にして、電動機を使用し停電対策に軽油発動機を備えた。その後トラック輸送の発達で1986(同61)年に臨港線は役割を終えた。可動橋は名古屋港管理組の管理に移され、市民からの要望もあり産業遺産として保存され、名古屋港の名物となっている。名古屋港の跳上橋は、1986(同61)年に登録有形文化財に登録された。



正面から見た可動橋

筆者撮影



名古屋港臨港線が堀川口駅まで延長された鉄道可動橋と東神倉庫

筆者作成



稼働中の可動橋

提供：名古屋港管理組合

(大橋公雄)